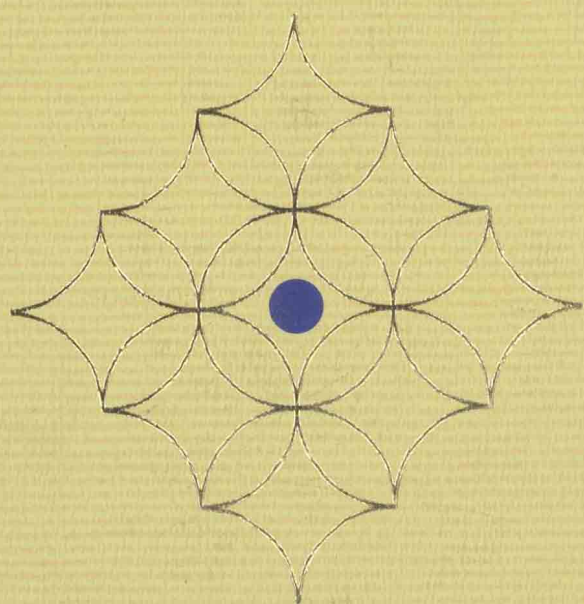




現代日本文學大系

7

森 鷗外集(一)

筑摩書房

特裝版

現代日本文學大系 7

昭和五十六年十月二十日 発行

森鷗外集(一)

著者 森 鷗 外

発行者 布川角左衛門

発行所 東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

郵便番号 一〇一―一九一
電話東京 例七六五一(営業)
例六七一一(編集)
振替口座東京 六―四一二三

総発売元 東京都三鷹市下連雀三の二七の一
東京図書販売

郵便番号 一八―
電話 〇四二―四九一五五〇―

印刷 株式会社 精興社 製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

森鷗外集(一) 目次

卷頭写真
筆蹟

即興詩人

舞姫

うたかたの記

文づかひ

半日

追儼

大発見

魔睡

キタ・セクスアリス

三

一七

一六

一五

一四

一三

一七

二〇

二二

金貨
普請中
花子
あそび
沈黙の塔
食堂
蛇
妄想
心中
雁
灰燼
百物語
かのやうに

二九
二八
二五
二四
二三
二二
二一
二〇
一九
一八
一七
一六
一五
一四
一三
一二
一一
一〇
九
八
七
六
五
四
三
二
一

〔付録〕

森鷗外

遺言状のこと

森鷗外

年譜

著作目録

小島政二郎 四九

中野重治 四七

小泉信三 四三

四三

四〇

森
鷗
外
集
(一)

無姫

鷗外森太郎著

石炭をば早や積み果てつ中等室の阜のほろりきいと閑
かよて熾熱燈の晴れおほき^①もやくな^②し今宵も初毎
日こゝこ集ひ来る骨牌仲間もホテルに宿りて舟に残り
し余一人のみなれど

五年前の事なりしが平生の望み足りて洋行の公命を蒙
りそのセイゴンの港より来し頃を自らみよもの耳に
聞くものとて新し^③いゆきなく筆に任せて書き記
したる紀行多日は^④終言をやら^⑤けん當時の新聞に
載せられて世の人にもてはやされ^⑥ぬと今日となりて
思へど稱な^⑦き志操身の程をらぬ放言さらぬ世の常の

即興詩人

第十三版題言

初版例言

一、即興詩人は羅馬の人 HANS CHRISTIAN ANDERSEN (1805—1875) の作にして、原本の初版は千八百三十四年に世に公にせられぬ。

二、此訳は明治二十五年九月十日稿を起し、三十四年一月十五日完成す。殆ど九星霜を経たり。然れども軍職の身に在るを以て、稿を属するは、大抵夜間、若くは大祭日日曜日にして家に在り客に接せざる際に於いてす。予は既に、歳月の久しき、嗜好の屢々変じ、文致の画一なり難きを憾み、又筆を擱くことの頻にして、興に乗じて揮灑すること能はざるを惜みたりき。世或は予其職を曠しくして縦に述作に耽ると謂ふ。冤も亦甚しきかな。

三、文中加特力教の語多し。印刷成れる後、我国公教会の定訳あるを知りぬ。而れども遂に改刪すること能はず。

四、此書は印するに四号活字を以てせり。予の母の、年老い目力衰へて、毎に予の著作を読むことを嗜めるは、此書に字形の大なるを適みし所以の一なり。夫れ字形は大なり。然れども紙面殆ど余白を留めず、段落猶且連続して書し、以て紙数をして太だ加はらざらしむることを得たり。

明治三十五年七月七日夜志津陣營に於いて

訳者識す

是れ予が壮時の筆に成れる IMPROVISATOREN の訳本なり。國語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむと欲せし、放胆にして無謀なる嘗試は、今新に其得失を論ずることを須るべし。初めこれを縮刷に付するに臨み、予は大いに字句を削正せむことを期せしに、會々歐洲大戰の起るありて、我國も亦其旋渦中に投ずるに至りぬ。羽檄旁午の間、予は僅に仮刷紙を一閱することを得しのみ。大正三年八月三十一日觀潮樓に於いて

訳者又識す

わが最初の境界

羅馬に往きしことある人はピアツツア、バルペレイニを知りたるべし。こは貝殻持てるトリイトンの神の像に造り倣したる、美しき噴井ある、大なる広こうちの名なり。貝殻よりは水湧き出でてその高さ数尺に及べり。羅馬に往きしことなき人もかの広こうちのさまをば銅板画にて見つることあらむ。かゝる画にはピア、フェリチエの角なる家の見えぬこそ恨なれ。わがいふ家の石垣よりのぞきたる三条の樋の口は水を吐きて石盤に入らしむ。この家はわがためには尋常ならぬおもしろ味あり。そをいかにといふにわれはこの家にて生れぬ。首を回してわが禪かりける程の事をおもへば、目もくるめくばかりいろ／＼なる記念の多きことよ。我はいづこより語り始めむかと心迷ひて為むすべを知らず。又我世の伝奇の全局を見わたせば、われはいよ／＼これを写す手段に苦めり。いかなる事をか緊要ならずとして棄て置くべき。いかなる事をか全画面をとおもひ浮べしめむために殊更に数へ挙ぐべき。わがためには面白きことも外人のためには何の興もなきものあらむ。われは我世のおはいなる穢物語をありのまゝに偽り飾ることなくして

語らむとす。されどわれは人の意を迎へて自ら喜ぶ性のこゝにもまぎれ入らむことを恐る。この性は早くもわが穢き時に、蟲の中なる雑草の如く萌え出で、やうやく聖經に見えたる芥子の如く高く空に向ひて長じ、つひには一株の大木となりて、そが枝の間にわが七情は巢食ひたり。わが最初の記念の一つは既にその芽生を見せたり。おもふにわれは最早六つになりし時の事ならむ。われはおのれより穢き子供三人と向ひなる尖帽僧の寺の前にて遊びき。寺の扉には小き真鍮の十字架を打ち付けたき。その処はおほよそ扉の中程にてわれは僅に手をさし伸べてこれに達することを得き。母上は我を伴ひてかの扉の前を過ぐるごとに、必ずわれを掻き抱きてかの十字架に接吻せしめ給ひき。あるときわれ又子供と遊びたりしに、甚だ穢き一人がいふやう。いかなれば耶蘇の禪子は一たびもこの群に來て、われ等と共に遊ばざるといひき。われさかしく答ふるやう。むべなり、耶蘇の禪子は十字架にかゝりたればといひき。さてわれ等は十字架の下にゆきぬ。かしこには何物も見えざりしかど、われ等は猶母に教へられし如く耶蘇に接吻せむとおもひき。さるを我等が口はかしこに届くべきならねば、我等はかはるゝ抱き上げて接吻せしめき。一人の子のさし上げられて僅に唇を尖らせたるを、抱いたる子力足らねば落しつ。この時母上通りかゝり給へり。この遊のさまを見て立ち住まり、指組みあはせて宣ふやう。汝等はまことの天使なり。さて汝はいひさして、母上はわれに接吻し給ひ、汝はわが天使なりといひ給ひき。

母上は隣家の女子の前にて、わがいかに罪なき子なるかを繰り返して語り給ひぬ。われはこれを聞きしが、この物語はいたくわが心に協ひたり。わが罪なきことは固よりこれがため以前には及ばずなりぬ。人の意を迎へて自ら喜ぶ性の種は、この時始めて日光を吸ひ込みたりしなり。造化は我におとなしく軟なる心を授けたりき。さるを母上はつねに我がこゝろのおとなしきを我に告げ、わがまことに持てる長処と母上のわが持てりと思ひ給へる長処とを我にさし示して、小兒の罪なさはかの醜き「バジリスコ」の獸におなじきをおもひ給はざりき。

かれもこれもおのが姿を見るときは死なでかなはぬ者なるを。

彼尖帽宗の寺の僧にフラア、マルチノといへるあり。こは母上の懺悔を聞く人なりき。かの僧に母上はわがおとなしさを告げ給ひき。祈のこゝろをばわれ知らざりしかど、祈の詞をばわれ善く諳じて洩らすことなかりき。僧は我をかほゆきものにおもひて、あるとき我に一枚の図をおくりしことあり。図の中なる聖母のこぼし給ふおほいなる涙の露は地獄の骸の上におちかゝれり。亡者は争ひてかの露の滴りおつるを承けむとせり。僧は又一たびわれを伴ひてその僧舎にかへりぬ。當時わが目にとまりしは、方なる形に作りたる円柱の廊なりき。廊に囲まれたるは小き馬鈴薯園にて、そこにはいとすぎ(チブレッツソ)の木二株、檸檬の木一株立てりき。開け放ちたる廊には世を遊りし僧どもの像をならへ懸けたり。部屋といふ部屋の戸には献身者の伝記より撰び出したる画図を貼り付けたり。當時わがこの図を觀し心は、後になりてラファエロ、アンドレア、デル、サルトオが作を觀る心におなじかりき。

僧はそちは心猛き童なり、いで死人を見せむといひて、小き戸を開きつ。こゝは廊より二三級低きところなりき。われは延かれて級を降りて見しに、こゝも小き廊にて、四圍悉く觸體なりき。觸體は觸體と接して壁を成し、壁はその並びざまにて許多の小蟲に分れたり。おほいなる蟲には頭のみならず、胴をも手足をも具へたる骨あり。こは高位の僧のみまかりたるなり。かゝる骨には褐色の尖帽を被せて、腹に繩を結び、手には一卷の經文若くは結れたる花束を持たせたり。贊卓、花形の燭台、そのほかの飾をば肩胛、脊椎などにて細工したり。人骨の浮彫あり。これのみならず忌まはしくも、又趣なきはこゝの拵へざまの全体なるべし。僧は祈の詞を唱へつゝ行くと、われはひたと寄り添ひて従へり。僧は唱へ畢りていふやう。われも早晩こゝに眠らむ。その時汝はわれを見舞ふべきかといふ。われは一語をも出すこと能はずして、僧と僧のめぐりなる気味わるきものと驚き胎たり。まことに我が如き禪子をかゝるところに伴ひ入りしは、いとおろかなる

業なりき。われはかしこにて見しもの心に心を動かさるゝこと甚しかりければ、歸りて僧の小房に入りしとき纔に生き返りたるやうなりき。この小房の窓には黄金色なる柑子のいと美しきありて、殆ど一間の中に垂れむとす。又聖母の画あり。その姿は天使に担ひ上げられて日光明なるところに浮び出でたり。下には聖母の息ひたまひし墓穴ありてもいろいろの花これを掩ひたり。われはかの柑子を見、この画を見るに及びて、わづかに我にかへりしなり。

この始めて僧房をたづねし時の事は、久しき間わが空想に好き材料を与へき。今もかの時の事をおもへば、めづらしくあざやかに目の前に浮び出でむとす。わが当時の心にては、僧といふ者は全く我等の知りたる常の人とは殊なるやうなりき。かの僧が褐色の衣を着たる死人の殆どおのれとおなじさまると共に棲めること、かの僧があまたの尊き人の上を語り、あまたの不思議の蹟を話すこと、かの僧の尊さをば我母のいたく敬ひ給ふことなどを思ひ合する程に、われも人と生れたる甲斐にかゝる人にならばやと折々おもふことありき。

母上は未亡人なりき。活計を立つるには、鍼仕事して得給ふ錢と、むかし我等が住みたりしおほいなる部屋を人に借して得給ふ価とあるのみなりき。われ等は屋根裏の小部屋に住めり。かのおほいなる部屋に引き移りたるはフエデリゴといふ年少き画工なりき。フエデリゴは心敏く世をおもしろく暮らす少年なりき。かれはいとも遠きところより来ぬといふ。母上の物語り給ふを聞けば、かれが故郷にては聖母をも耶蘇の禪子をも知らずとぞ、その国の名をば羅馬といへり。當時われは世の中にいろ／＼の国語ありといふことを解せねば、画工が我が言ふことを曉らぬを耳とほきがためならむとおもひ、おなじ詞を繰り返して声の限り高いふに、かれはわれを可笑しきものにおもひて、をり／＼果をわれに取らせ、又わがために兵卒、馬、家などの形をゑがきあたへしことあり。われと画工とは幾時も立たぬに中善くなりぬ。われは画工を愛しき。母上もをり／＼かれは善き人なりと宣ひき。さるほどにわれはとある夕母上とフラア・マルチノとの話を聞き

しが、これを聞きてよりわがかの技芸家の少年の上をおもふ心あやく動かされぬ。かの異国人は地獄に墜ちて永く浮ぶ瀬あらざるべきかと母上問ひ給ひぬ。そはひとりかの男の上のみにあらじ。異国人のうちにはかの男の如く悪しき事をば一たびもせざるもの多し。かの輩は貧乏人に逢ふときは物取らせて吝むことなし。かの輩は債あるときは期を愆たす額をたがへずして払ふなり。然のみならず、かの輩は吾邦人のうちなる多人数の作る如き罪をば作らざるやうにおもはる。母上の問はるおほよそ此の如くなりき。

フラア・マルチノの答へけるやう。さなり。まことにいはるゝ如き事あり。かの輩のうちには善き人少からず。されどおん身は何故に然るかを知り給ふ。見給へ。世中をめぐりありく悪魔は、邪宗の人の所詮おのが手に落つべきを知りたるゆゑ、強ひてこれを誘はむとすることなし。このゆゑに彼輩は何の苦もなく善行をなし、罪惡をのがる。善き加特力教徒はこれと殊にて神の愛子なり、これを陥れむには悪魔はさまざまの手立を用ゐざること能はず。悪魔はわれ等を誘ふなり。われ等は弱きものなればその手の中に落つること多し。されど邪宗の人は肉体にも悪魔にも誘はるゝことなしと答へき。

母上はこれに聞きて復た言ふべきこともあらねば、便なき少年の上をおもひて大息つき給ひぬ。かたへ聞せしわれは泣き出しつ。こはかの人の永く地獄にありて饑に苦められむつらさをおもひければなり。かの人は善き人なるに、わがために美しき画をかく人なるに。

わが釋きころ、わがためにおほいなる意味ありと覚えし第三の人はベツボのをぢなりき。悪人ベツボといふも西班牙の王といふも皆その人の綽号なりき。此王は日ごとに西班牙磔の上に御ましましき。(西班牙広こうちよりモンテ、ピンチョオの上なる街に登るには高く広き石級あり。この石級は羅馬の乞兒の集まるところなり。西班牙広こうちより登るところなればかく名づけられしなり。)ベツボのをぢは生れつき両の足痿へたる人なり。當時そを十字に組みて折り敷き居たり。されど釋きときよりの熟練にて、をぢは両手もて歩くこととい

巧なり。其手には革紐を結びて、これに板を掛けたるが、をちがこの道具にて歩む速さは健かなる脚もて行く人に劣らず。をちは日ごとに上にもいへるが如く西班牙磔の上に坐したり。さりとて外の乞児の如く憐を乞ふにもあらず。唯だおのが前を過ぐる人あるごとに、詐ありげに面をしかめて「ボン、ジョオルノオ」（我俗の今日はといふ如し）と呼べり。日は既に入りたる後もその呼ぶ詞はかはらざりき。母上はこのをちを敬み給ふことさまでならざりき。あらず。親族にかゝる人あるをば心のうちに恥ぢ給へり。されど母上はしばしば我に向ひて、そなたのためなれば、彼につきあひおくとたまひき。余所の人の此世にありて求むるものをば、かの人簞の底に藏めて持ちたり。若し臨終に、寺に納めだにせずば、そを譲り受くべき人、わが外にはあらぬを、母上は待みたたまひき。をちも我に親むやうなところありしが、我は其側にあるごとに、まことに喜ばしくおもふこと絶てなかりき。或る時、我はをちの振舞を見て、心に怖を懷きはじめき。こは、をちの本性をも見るに足りぬべき事なりき。例の石級の下に老いたる盲の乞児ありて、往きかふ人の「バヨツコ」（我二銭許に當る銅貨）一つ投げ入れむを願ひて、薄葉鉄の小筒をさら／＼と鳴らし居たり。我がをちを、面にやさしげなる色を見せて、帽を揮り動しなどすれど、人そその前をばいたづらに過ぎゆきて、かの盲人の何の会釈もせざるに錢を与へき。三人かく過ぐるまでは、をち傍より見居たりしが、四人めの客かの盲人に小貨幣二つ三つ与へしとき、をちは毒蛇の身をひねりて行く如く、石級を下りて、盲の乞児の面を打ちしに、盲の乞児は錢をも杖も取りおとしつ。ベツボの叫びけるやう。うぬは盗人なり。我錢を竊む奴なり。立派に魔人といはるべき身にもあらで、たゞ目の見えぬを手柄顔に、わが口に入らむとする「パン」を奪ふこそ心得られぬといひき。われはこゝまでは聞きつれど、こゝまでは見てありつれど、この時買ひに出でたる、一「フォリエツタ」（一勺）の酒をひさげて、急ぎて家にかへりぬ。

大祭日には、母につきてをちがり祝にゆきぬ。その折には苞苴もて

ゆくことなるが、そはをちが嗜めるおほ房の葡萄二つ三つか、さらずば砂糖につけたる林檎などなりき。われはをち御と呼びかけて、その手に接吻しき。をちはあやしげに笑ひて、われに半「バヨツコ」を与へ、菓子を買ひそ、菓子は食ひ畢りたるるとき、迹かたもなくなるものなれど、この錢はいつまでも貯へらるゝものぞと教へき。

をちが住めるところは、暗くして見苦しかりき。一間には窓といふものなく、また一間には壁の上の端に、破硝子を紙もて補ひたる小窓ありき。臥所の用をもなしたる大箱と、衣を藏むる小桶二つとの外には、家具といふものなし。をちがり往け、といはるゝときは、われ必ず泣きぬ。これも無理ならず。母上はをちにやさしくせよ、と我をしへながら、我を嚇さむとおもふときは、必ずをちを案山子に使ひ給ひき。母上の宣たまひけるやう。かく悪戯せば、好きをち御の許にやるべし。さらば汝も磔の上に坐して、をちと共に袖乞するならむ、歌をうたひて「バヨツコ」をめぐるゝを待つならむとのたまふ、われはこの詞を聞きて、あながち恐るゝことなかりき。母上は我をいくし給ふこと、目の球にも優れるを知りたれば。

向ひの家の壁には、小龕をしつらひて、それに聖母の像を据ゑ、その前にはいつも燈を燃やしたり。「アエ、マリア」の鐘鳴るころ、われは近隣の子供と像の前に跪きて歌ひき。燈の光ゆめくときは、聖母も、いろ／＼の紐、珠、銀色したる心の臓など如て飾りたる耶穌のをさな子も、共に動きて、我等が面を見て笑み給ふ如くなりき。われは高く朗なる声して歌ひしに、人々聞きて善き声なりといひき。或る時英吉利人の一家族、我歌を聞きて立ちとまり、歌ひ畢るを待ちて、長らしき人われに銀貨一つ与へき。母に語りしに、そなたが声のめでたき故、とのたまひき。されどこの詞はその後我折を妨ぐることいかばかりなりしを知らず。それよりは、聖母の前にて歌ふごとに、聖母の上をのみ思ふこと能はずして、必ず我声の美しきを聞く人やあると思ひ、かく思ひつゝも、聖母のわがあだし心を懷けるを嫉み給はむかと思ふとあやぶみ、聖母に向ひて罪を謝し、あはれなる子に慈悲の眸を垂れ

給へと願ひき。

わが余所の子供に出で逢ふは、この夕の祈の時のみなりき。わが世は静けかりき。わが自ら作りたる夢の世に心を潜め、仰ぎ臥して開きたる窓に向ひ、伊太利の美しき青空を眺め、日の西に傾くとき、紫の光ある雲の黄金色したる地の上に垂れかかりたるをめで、時の遷るを知らざることしばしなりき。ある時は、遠くクキリナアル（丘の名にて、其上に法皇の宮居あり）と家々の棟とを越えて、紅に染まりたる地平線のわたりに、真黒に浮き出で、見ゆる「ビニヨロ」の木々の方へ、飛び行かばや、と願ひき。我部屋には、この眺ある窓の外、中庭に向へる窓ありき。我家の中庭は、隣の家の中庭に並び、いづれもいと狭く、上の方は木の「アルタナ」（物見のやうにしたる屋根）にて鎖されたり。庭ごとに石にて繋みたる井ありしが、家々の壁と井との間をば、人ひとり僅かに通らるゝほどなれば、我は上より覗きて、二つの井の内を見るのみなりき、緑なるほうらいしだ（アザアンツム）生ひ茂りて、深きところは唯だ黒くのみぞ見えたる。俯してこれを見るたびに、われは地の底を見おろすやうに覺えて、こゝにも怪しき境ありとおもひき。かゝるとき、母上は杖の尖にて窓硝子を淨め、なんぢ井に墜ちて溺れだにせずば、この窓に当りたる木々の枝には、汝が食ふべき果おほく熟すべしとのたまひき。

隧道、ちご

我家に宿りたる画工は、廓外に出づるをり、我を伴ひゆくことありき。画を作る間は、われかれを妨ぐることなかりき。さて作り畢りたるとき、われ碑き物語して慰むるに、かれも今はわが国の詞を解して面白がりたり。われは既に一たび画工に随ひて、「クリア、ホスチリア」にゆき、昔游戲の日まで猛獣を押し込めおきて、つねに無事の俘囚を獅子、「イエナ」獣なんどの餌としたりと聞く、かの暗き洞の深き処まで入りしことあり。洞の裡なる暗き道に、我等を導きてくゞり

入り、燃ゆる松火を、絶えず石壁に振り当てたる僧、深き池の水の、鏡の如く明にて、目の前には何もなきやうなれば、その足もとまで落へ寄せたるを知らむには、松火もて触れ探らではかなはざるほどなるいづれもわが空想を激したりき。われは怖をば懐かざりき。そは危しといふことを知らねばなりけり。

街のはつる処に、「コリゼエオ」（大観棚）の頂見えたる時、われ等はかの洞の方へゆくにや、と画工に問ひしに、否、あれよりは適に大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたをも景色と俱に享すべし、と答へき。葡萄園の間を過ぎ、古の混堂の址を囲みたる白き石垣に沿ひて、ひたすら進みゆく程に羅馬の府の外に出でぬ。日はいと烈しかりき。緑の枝を手折りて、車の上に挿し、農夫はその下に眠りたるに、馬は車の片側に吊り下げたる一束の秣を食ひつゝ、ひとり徐に歩みゆけり。やう／＼女神エジエリアの洞にたどり着きて、われ等は朝饗を食へ、岩間より湧き出づる泉の水に、葡萄酒混ぜて飲みき。洞の裏には、天井にも四方の壁にも、すべて絹、天鵝絨などにて張りたらむやうに、緑こまやかなる苔生ひたり。露けく茂りたる藁の、おほいなる洞門にかゝりたるさまはカラブリア州の谿間なる葡萄架を見る心地す。洞の前数歩には、その頃いと寂しき一軒の家ありて、「カタコンバ」のうちの一つに造りかけたりき。この家今は潰れて断礎をのみぞ留めたる。「カタコンバ」は人なり知りたる如く、羅馬城とこれに接したる村々とを通する隧道なりしが、半はおのづから壊れ、半は盗人、ぬけうりする人なんどの隠家となるを厭ひて、石もて塞がれたるなり。当時猶存したるは、聖セバスチヤノ寺の内なる穹窿の墓穴よりの入口と、わが言へる一軒家よりの入口とのみなりき。さてわれ等はこの一軒家のうちなる入口より進み入りしが、おもふに最後に此道を通りたるはわれ等二人なりしなるべし。いかにといふに此入口はわれ等が危き目に逢ひたる後、いまだ幾もあらぬに塞がれて、後には寺の内なる入口のみ残りぬ。かしこには今も僧一人居りて、旅人を導きて穴に入らしむ。

深きところには、軟なる土に掘りこみたる道の行き違ひたるあり。その枝の多き、その様の相似たる、おもなる筋を知りたる人も踏み迷ふべきほどなり。われは釋心に何ともおもはず。画工はまた予め其心して、我を伴ひ入りぬ。先づ蠟燭一つ点し一つをば猶衣のかくしの中に貯へおき、一卷の糸の端を入口に結びつけ、さて我手を引きて進み入りぬ。忽ち天井低くなりて、われのみ立ちて歩まるゝところあり、忽ち又岐路の出づるところ広がりて方形をなし、見上ぐるばかりなる穹窿をなしたるあり。われ等は中央に小き石卓を据ゑたる円堂を過りぬ。こゝは始て基督教に帰依したる人々の、異教の民に逐はるゝごとに、ひそかに集りて神に仕へまつりしところなりとぞ。フェデリゴはこゝにて、この壁中に葬られたる法皇十四人、その外数千の獻身者の事を物語りぬ、われ等は石龕のわれ目に燭火さしつけて、中なる白骨を見き。(こゝの墓には何の飾もなし。拿破里に近き聖ヤヌアリウスの「カタコンバ」には聖像をも文字をも彫りつけたるあれど、これも技術上の備あるにあらず。基督教徒の墓には、魚を彫りたり。希臘文の魚といふ字は「イヒトユス」なれば、暗に「イエソウス、クリストス、テオウ、ウイオス、ソオテル」の文の首字を集めて語をなしたるなり。此希臘文はこゝに耶蘇基督神子救世者と云ふ。)われ等はこれより入ること二三歩にして立ち留りぬ。ほぐし來たる糸はこゝにて尽きたればなり。画工は糸の端を控紐の孔に結びて、蠟燭を拾ひ集めたる小石の間に立て、さてそこに蹲りて、隧道の模様を写し始めき。われは傍なる石に踞けて合掌し、上の方を仰ぎ視るなり。燭は半ば流れたり。されどさきに貯へおきたる新なる蠟燭をば、今取り出してその側におきたる上、火打道具さへ帶びたれば、消えなむ折に火を点すべき用意ありしなり。

われはおそろしき暗黒天地に通ずる幾条の道を望みて、心の中にさまざまな奇怪なる事をおもひ居たり。この時われ等が周囲には寂として何の声も聞えず、唯だ忽ち断え忽ち続く、物寂しき岩間の雫の音を聞くのみなりき。われはかく由なき妄想を懷きてしばしあたりを忘れ

居たるに、ふと心づきて画工の方を見やれば、あな訝かし、画工は大息つきて一つところを馳せめぐりたり。その間かれは頻に俯して、地上のものを捜し索むる如し。かれは又火を新なる蠟燭に点じて再びあたりをたづねたり。その気色たゞならず覺えければ、われも立ちあがりて泣き出しつ。

この時画工は声を勵まして、こは何事ぞ、善き子なれば、そこに坐りぬよ、と云ひしが、又眉を顰めて地を見たり。われは画工の手に取りすがりて、最早登りゆくべし、こゝには居りたくなし、とむつかりたり。画工は、そちは善き子なり、画かきてや遣らむ、果子をや与へむ、こゝに錢もあり、といひつゝ、衣のかくしを探して、財布を取り出し、中なる錢をば、ことごとく我に与へき。我はこれを受くるるとき、画工の手の水の如く冷になりて、いたく震ひたるに心づきぬ。我はいよいよ騒ぎ出し、母を呼びてます／＼泣きぬ。画工はこの時我肩を掴みて、劇しくゆすり揺かし、静にせずば打擲せむ、といひしが、急に手巾を引き出して、我腕を縛りて、しかと其端を取り、さて俯してあまた／＼びに接吻し、かはゆき子なり、そちも聖母に願へ、といひき。糸をや失ひ給ひし、と我は叫びぬ。今こそ見出さめ、といひ／＼、画工は又地上をかいさぐりぬ。

さる程に、地上なりし蠟燭は流れ畢りぬ。手に持ちたる蠟燭も、かなたにたを捜し索むる忙しさに、流るゝこといふ／＼早く、今は手の際まで燃え來りぬ。画工の周章は大方ならざりき。そも無理ならず。若し糸なくして歩を運ば、われ等は次第に深きところに入りて、遂に活路なきに至らむも計られざればなり。画工は再び氣を勵まして探りしが、こたびも糸を得ざりしかば、力抜けて地上に坐し、我頸を抱きて大息つき、あはれなる子よ、とつぶやきぬ。われはこの詞を聞き、最早家に還られざることぞ、とおもひければ、いたく泣きぬ。画工にあまりに緊しく抱き寄せられて、我が縛られたる手はいざり落ちて地に達したり。我は覺えず埃の間に指さし入れしに、例の糸を握み得たり。こゝにこそ、と我呼びしに、画工は我手を撚りて、物狂はし

きまでよろこびぬ。あはれ、われ等二人の命はこの糸にぞ繋ぎ留められける。

われ等の再び外に歩み出でたるときは、日の暖に照りたる、天の蒼く晴れたる、木々の梢のうるはしく緑なる、皆常にも増してよろこばしかりき。フエデリゴは又我に接吻して、衣のかくしより美しき銀の鍔を取り出し、これをば汝に取らせむ、といひて与へき。われはあまりの嬉しさに、けふの恐ろしかりし事共、はや悉く忘れ果てたり。されど此事を得忘れ給はざるは、始終の事を聞き給ひし母上なりき。フエデリゴはこれより後、我を伴ひて出づることを許されざりき。フラア・マルチノはいふやう。かの時二人の命の助かりしは、全く聖母のおほん恵にて、邪宗のフエデリゴが手には授け給はざる糸を、善く神に仕ふる、やさしき子の手には与へ給ひしなり。されば聖母の恩をば、身を終ふるまで、ゆめ忘るゝこと勿れといひき。

フラア・マルチノがこの詞と、或る知人の戯に、アントニオはあやしき子なるかな、うみの母をば愛するやうなれど、外の女をばことごとく嫌ふと見ゆれば、あれをば、人となりて後僧にこそすべきなれ、といひしことあるとによりて、母上はわれに出家せしめむとおもひ給ひき。まことに我は奈何なる故とも知らねど、女といふ女は側に來らるゝだに厭はしう覚えき。母上のところに来る婦人は、人の妻ともいはず、処女ともいはず、我が釋き詞にて、このあやしき好憎の心を語るを聞いて、いとおもしろき事におもひ做し、強ひて我に接吻せむとしたり。就中マリウチアといふ娘は、この戯にて我を泣かせること屢なりき。マリウチアは活潑なる少女なりき。農家の子なれど、裁縫店にて雛形娘をつとむるゆゑ、華麗やかなる色の衣をよそひて、幅広き白き麻布もて髪を巻けり。この少女フエデリゴが画の雛形をもつとめ、又母上のところにも遊びに来て、その度ごとに自らわがいひなづけの妻なりといひ、我を小き夫なりといひて、迫りて接吻せむとしたり。われ諾はねば、この少女しばし武を用ゐき。或る日われまた脅されて泣き出し、に、さては猶釋尼なりけり、乳房御ませずては、

啼き止むまじ、とて我を掻き抱かむとす。われ慌てて逃ぐるを、少女はすかさず追ひすがりて、両膝にて我身をしかと挟み、いやがりて振り向かむとする頭を、やう／＼胸の方へ引き寄せたり。われは少女が挿したる銀の矢を抜きたるに、豊なる髪は波打ちて、我身をも、露れたる少女が肩をも掩はむとす。母上は室の隅に立ちて、笑みつつマリウチアがなすわざを勧め励まし給へり。この時フエデリゴは戸の片陰にかくれて、竊に此群をゑがきぬ。われは母上にいふやう。われは生涯妻といふものをば持たざるべし。われはフラア・マルチノの君のやうなる僧とこそならめといひき。

夕ごとにわが怪しく何の詞もなく坐したるを、母上は出家せしむるにたよりよき性なりとおもひ給ひき。われはかゝる時、いつも人となりたる後、金あまた得たらむには、いかなる寺、いかなる城をか建つべき、寺の主、城の主となりなん日には、「カルデナアレ」の僧の如く、赤き袈裟に乗りて、金色に装ひたる僕あまた随へ、そこより出入せんとおもひき。或るときは又フラア・マルチノに聞きたる、種々なる獻身者の話によそへて、おのれ獻身者とならむをりの事をおもひ、世の人いかにおのれを責むとも、おのれは聖母のめぐみにて、つゆばかりも苦痛を覚えざるべしとおもひき。殊に願はしく覚えしは、フエデリゴが故郷にたづねゆきて、かしこなる邪宗の人々をまことの道に帰依せしむる事なりき。

母上のいかにフラア・マルチノと謀り給ひて、その日とはなりけむ。それはわれ知らざりしに、或る朝母上は、我に小き衣を着せ、其上に白衣を打掛け給ひぬ。此白衣は膝のあたりまで届きて、寺に仕ふる児の着るものに同じかりき。母上はかく為立て、我を鏡に向はせ給ひき。我は此日より尖帽宗の寺にゆきてちごととなり、火伴の童達と共に、おはいなる吊香炉を提げて儀にあづかり、また贊卓の前に出で、讚美歌をうたひき。給ての指図をばフラア・マルチノなしつ。われは幾程もあらぬに、小き寺のうちに住み馴れて、贊卓に画きたる神の使の童の顔を悉く覚え、柱の上なるうねりたる模様を識り、瞑目したるとき

も、醜き竜と戦ひたる、美しき聖ミケルを面前に見ることを得るやうになり、鋪床に刻みたる髑髏の、緑なる蒿かづらにて編みたる環を戴けるを見てはさまざまの怪しき思をなしき。(聖ミケルが大なる翼ある美少年の姿にて、悪鬼の頭を踏みつけ、鎗をその上加へたるは、名高き画なり。)

美小鬘、即興詩人

万聖祭には衆人と俱に骨竈にありき。こはフラア・マルチノの嘗て我を伴ひて入りにしところなり。僧どもは皆経を誦するに、我は火伴の童二人と共に、髑髏の髣髴卓の前に立ちて、提香炉を振り動したり。骨もて作りたる燭台に、けふは火を点したり。僧侶の遺骨の手足全きは、けふ額に新しき花の環を戴きて、手に露けき花の一束を取りたり。この祭にも、いつもの如く、人あまた集ひ来ぬ。歌ふ僧の「ミゼレレ」(「ミゼレレ、メイ、ドミネ」、主よ、我を憐れ給へ、と唱へ出す加特力教の歌をいふ) 唱へはじむるとき、人々は膝を屈めて拝したり。髑髏の色白みたる、髑髏と我との間に渦巻ける香の煙の怪しげなる形に見ゆるなどを、我は久しく打ち目守り居たりしに、こはいかに我身の周囲の物、皆独樂の如くに廻り出しつ。物を見るに、すべて大なる虹を隔て、望むが如し。耳には寺の鐘百ばかりも、一時に鳴るらむやうなる音聞ゆ。我心は早き流を舟にて下る如くにて、譬へむやうなく目出たかりき。これより後の事は知らず。我は氣を喪ひき。人あまた集ひて、鬱陶しくなりたるに、我空想の燃え上りたるや、この眩暈のとなりけむ。醒めたるときは、寺の園なる構様の木の下にて、フラア・マルチノが膝に抱かれ居たり。

わが夢の裡に見きといふ、首尾整はざる事を、フラア・マルチノを始として、僧ども皆神の業なりといひき。聖のみたまは面前を飛び過ぎ給ひしかと、はかなき童のそのひかり耀けるさまにえ堪へで、卒倒したるならむといひき。これより後、われは怪しき夢をみることに頻なり。

りき。そを母上に語れば、母上は又友なる女どもに伝へ給ひき。そが中には、われまことにさる夢を見しにはあらねど、見きと語りて語りしもありき。これによりて、我を神のおん子なりとする、人々の惑は、日にけに深くなりまされぬ。

さる程に嬉しき聖誕祭は近づきぬ。つねは山住ひする牧者の笛ふき(ピツフェラリ)となりたるが、短き外套着て、紐あまた下げ、矢ひたる帽を戴き、聖母の像ある家ごとく音信れ来て、救世主の誕れ給ひしは今ぞ、と笛の音に知らせありきぬ。この単調にして悲しげなる声を聞きて、我は朝な／＼覚むるが常となりぬ。覚むれば説教の稽古すおほよそ聖誕日と新年との間には、「サンタ、マリヤ、アラチエリ」の寺なる基督の像のみまへにて、童男童女の説教あること、年ごとの例なるが、我はことし其一人に当りたるなり。

吾齡は甫めて九つなるに、かしこにて説教せむこと、いとめでたき事なりとて、歎びあふは、母上、マリウチア、我の三人のみかは。わがありあふ卓の上に登りて、一たびさらへ聞かせたるを聞きし、画工フェデリゴもこよなうめでたがりぬ。さて其日になりければ、寺のうちなる卓の上に押しあげられぬ。我家のとは違ひて、この卓には毯を被ひたり。われはよその子供に如く、語じたるまゝの説教をなしき。聖母の心より血汐出でたる、穢き基督のめでたきなど、説教のたねなりき。我順番になりて、衆人に仰が見られしとき、我胸跳りしは、恐ろしさゆゑにはあらで、喜ばしさのためなりき。これ迄の小児の中に、尤も人々の氣に入りしもの、即ち我なること疑なかりき。さるをわが後に、卓の上に立たせられたるは、小き女の子なるが、その言ふべからず優しき姿、驚くべきまでしほらしき顔つき、調清き柔に似たる声音に、人々これぞ神のみつかひなるべき、とさ／＼やきぬ。母上は、我子に優る子はあらじ、といはまほしう思ひ給ひけむが、これさへ声高く、あの女の子の髣髴卓に画ける神のみつかひに似たることよ、とのたまひき。母上は我に向ひて、かの女子の怪しく濃き目の色、鴉青いろの髪、をさなくて又伶俐げなる顔、美しき紅葉のやうなる手などを、

繰りかへして誉め給ふに、わが心には妬まじきやうなる情起りぬ。母上は我上をも神のみつかひに譬へ給ひしかども。

鶯の歌あり。まだ巢ごもり居て、薔薇の枝の緑の葉を啄めども、今生ぜむとする鶯をば見ざりき。二月三月の後、薔薇の花は開きぬ。今は鶯これにのみ鳴きて聞かせ、つひには刺の間に飛び入りて、血を流して死にき。われ人となりて後、しばし此歌の事をおもひき。されど「アラチエリ」の寺にては、我耳も未だこれを聞かず、我心も未だこれを会せざりき。

母上、マリウチア、その外女どもあまたの前にて、寺にてせし説教をくりかへすこと、しばしばありき。わが自ら喜ぶ心はこれにて慰められき。されど我が未だ語り厭かぬ間に、かれ等は早く聴き倦みき。われは聴衆を失はじの心より、自ら新しき説教一段を作りき、その詞は、まことの聖誕日の説教といはむよりは、寺の祭を叙したるものといふべき詞なりき。そを最初に聞きしはフエデリゴなるが、かれは打ち笑ひ乍らも、そちが説教は、兎も角もフラア・マルチノが教へしよりは善し、そちが身には詩人や舍れる、といひき。フラア・マルチノより善しといへる詞は、わがためにいと喜ばしく、さて詩人とはいかなるものならむとおもひ煩ひ、おそらくは我身の内に舍れる善き神のみつかひならむと判じ、又夢のうちに我に面白きものを見するものにと疑ひぬ。

母上は家を離れて遠く出で給ふこと稀なりき。されば或日の昼すぎ、トラスステエル（テエエル河の右岸なる羅馬の市区）なる友だちを訪はむ、とのたまひしは、我がためには祭に往くごとくなりき。日曜に着る衣をきよそひぬ。中単の代にその頃着る習なりし絹の胸当をば、針にて上衣の下に縫ひ留めき。領巾をば幅広き襷に摺みたり。頭には縫とりしたる帽を戴きつ。我姿はいとやさしかりき。

とぶらひ畢りて、家路に向ふころは、はや頗る遅くなりたれど、月影さやく、空の色青く、風いと心地好かりき。路に近き丘の上には、「チプレツツオ」、「ピニヨロ」などの常磐樹立てるが、怪しげなる

輪廓を、鋭く空に画きたり。人の世にあるや、とある夕、何事もあらざりしを、久しくえ忘れぬやうに、美しう思ふこともあるものなるが、かの帰路の景色、また然る類なりき。国を去りての後も、テエエルの流のさまを思ふごとに、かの夕の景色のみぞ心には浮ぶなる。黄なる河水のいと濃げに見ゆるに、月の光はさしたり。碾穀車の鳴り響く水の上に、朽ち果てたる樅柱、黒き影を印して立てり。この景色心に浮べば、あの折の心軽げなる少女さへ、扁鼓手に把りて、「サルタレルロ」舞ひつゝ過ぐらむ心地す。（「サルタレルロ」の事をば聊注すべし。こは単調なる曲につれて踊り舞ふ羅馬の民の技芸なり。一人にて踊ることあり。又二人にては舞へど、その身の相触るゝことはなし。大抵男子二人、若くは女子二人なるが、跳ぬる如き早足にて半圓に動き、その間手をも休むることなく、羅馬人に産れ付きたる、しなやかなる振をなせり。女子は裳裾を蹇ぐ。鼓をば自ら打ち、又人にも打たす。其調の変化といふは、唯遅速のみなり。）サンタ、マリア、デラ、ロツンダの街に来て見れば、こゝはまだいと賑はし。魚蠟の煙を風のまにまに吹き馳かせて、前に木机を据ゑ、そが上に月桂の青枝もて編みたる籠に貨物を載せたるを飾りたるは、肉賣る男、果賣る女などなり。剣栗並べたる釜の下よりは、火鑊立昇りたり。買人の物いひかはす声の高きは、伊太利ことば知らぬ旅人聞かば、命をも顧みざる争とやおもふらむ。魚売る女の店の前にて、母上識る人に逢ひ給ひぬ。女子の間とて、物語長きに、店の蠟燭流れ尽むとしたり。さて連れ立ちて、其人の家の戸口までおくり行くに、街の上はいふもさらなり、「ゴルソオ」の大道さへ物寂しう見えぬ。されど美しき水盤を築きたるピアツツア、デ、トレキイに曲り出でしときは、又賑はしきさき前の如し。

ここに古き殿づくりあり。意なく投げ置けたらむやうに見ゆる、礎の間より、水流れ落ちて、月は恰も好し棟の上にぞ照りわたれる。河伯の像は、重き石衣を風に吹かせて、大なる滝を見おろしたり。滝のほとりには、喇叭吹くトリイトンの神二人海馬を駈したり。その下